

論文

ソグド語の古代書簡Ⅱと涼州刺史張軌（255-314）

—シルクロード交易と河西の支配者との関係¹⁾—吉 田 豊[※]

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

Ⅰ. ソグド語の古代書簡の紹介と研究史概観

Ⅱ. 古代書簡Ⅱの1-40行目

Ⅲ. 25-29行目のテキストと翻訳：Sims-Williamsの訳と吉田訳の違い

Ⅳ. 張軌と司空

Ⅴ. 古代書簡の日付と司空の位が与えられた日付との関係

Ⅵ. ここまでのまとめと「syskwny = 使君」の可能性

Ⅶ. その他の問題

はじめに

魏の太和年間（227-232）に、敦煌太守であった倉慈の伝記である「倉慈伝」の森安孝夫による解説付きの翻訳（森安 2016, pp. 121-122）を見てみよう²⁾：

また常日頃、西域之雜胡（原文通り）が（中国本土に）朝貢しようとしてやってくると、（敦煌の）諸豪族らがたいていそこで迎えて通せんぼしてしまい、そこで貿易を無理強いするだけでなく、価格を騙したり、相手を侮ったり、勝手に放題で、実態がよくわからなかった。胡（原文通り）たちは常にこれを怨んでいたが、倉慈が（赴任すると）これらを皆慰勞するようになった。（魏の首都）洛陽方面に行きたい者のためには国内通行証（原文は過所）を発行してやり、敦煌郡から故国に帰還しようとする者のためには、手持ちの商品を郡政府の庫にある絹織物などと適正に交換してやり、おまけに道路を（途中まで）護送してやった。これによって（漢人の）民も胡人（原文は夷³⁾）も一致してその徳と恩恵とを称えた。数年で彼が太守の職についたまま亡くなると、人々は親戚を喪ったかのように悲嘆にくれ、その肖像を描いて在りし日をしのいだ。西域の諸胡（原文通り）も倉慈の死を聞き知ると、皆ことごとく（西域各地にある中国政府の）出先機関の役所に集まってきて哀悼の儀式を行い、ある者は小刀で顔面を傷つけ、血を流して誠心を表明したり、彼を記念するために祠を立てたり、遠くから皆でこれをまつたりした。（又常日西域雜胡欲來貢獻、而諸豪族多逆斷絕；既與貿遷、欺詐侮易、多不得分明。胡常怨望、

慈皆勞之。欲詣洛者、為封過所、欲從郡還者、官為平取、輒以府見物與共交市、使吏民護送道路、由是民夷翕然稱其德惠。數年卒官、吏民悲感如喪親戚、圖畫其形、思其遺像。及西域諸胡聞慈死、悉共會聚於戊己校尉及長吏治下發哀、或有以刀畫面、以明血誠、又為立祠、遙共祠之。『三国志』卷16魏書, pp. 512-513)

このように3世紀の段階でも河西の諸オアシス都市には、西域の商人たちが交易のために来ていたが、彼らの交易活動がうまくいくかどうかは、経路の安全だけではなく、その地を治めることになった為政者の人となりに大いに依存していたようだ。倉慈の訃報に接した西域の商人たちの激しい哀悼の表現は、彼らの悲痛な思いの吐露でもあったのだろう。

姑臧から敦煌まで祈連山脈の東に位置していた諸オアシス都市が連なる河西回廊は、後漢末以降中原の動乱をよそに独立して繁栄し、五胡十六国時代には、ここに前涼から北涼まで姑臧を主邑とする5つの辺境王国が150年ほど存続していた。そしてその繁栄の一端は、西域からの隊商の往来による中継貿易の商利によっていた。後漢の滅亡による中国の混乱で、それまで通りの朝貢貿易が成り立たなくなると、西域の商人たちは交易の為にこの地に往来するにとどまらず、商品の出荷地である河西地域に商人を滞在させるようになったようだ。倉慈の時代、227年のこととして、涼州の諸王は外交使節を蜀に派遣したが、その時の二十人あまりの使節の代表は、「月支、康居胡侯支富、康植等二十餘人（『三国志』卷33、蜀書・後主伝, p. 895）」であったとある。この時代、バクトリア商人（月支）やソグド商人（康

居）が、胡侯（異民族のリーダー）として姑臧にいたことが知られる。後の時代の薩宝の先駆けともみなされよう。⁴⁾

上で引用したのは3世紀の前半の逸話であるが、本稿で扱うソグド語の古代書簡は、異説はあったものの現在では、その時代からほぼ100年後の4世紀初めにこの河西から、西の楼蘭やソグド本土のサマルカンドに向けて発せられた手紙であると考えられている。本稿では、その中の1通（古代書簡II）の一節について、当時の河西の支配者についての情報を伝えているのではないかとする筆者の新しい解釈と、関連する事柄について検討してみたい。

I. ソグド語の古代書簡の紹介と研究史概観

シルクロードの交易の民として有名なソグド人がソグド語で残した文献の中では、Ancient Letters（古代書簡）と呼ばれる手紙が最も有名である。これはA. Steinが1907年に、敦煌の西にある玉門関を守るために漢代の長城沿いに設置された烽火台の遺跡の一つ（T. XII.a）で発見したものである。（図1）発見当時は未開封の状態で放置されていた。紙に書かれているが、見つかった場所が前漢から後漢にかけ

て使われていた烽火台であったことから、発見当時は後漢の時代の手紙ではないかと考えられていた。そして蔡倫が紙を発明したとされていた西暦105年からそれほど隔たっていない時代の紙で、当時としては世界最古の紙とも見なされていた。

見つかったのは、ほぼ原形をとどめる5点（AL I, II, III, IV, V）の手紙と、原形は失われているが両端が残る2点（AL VI, VII）と断片化した1点（AL VIII）の8通分の手紙であった。1931年になって、ドイツのイラン語学者のH. Reichelt（1931）がこれらの手紙を解読し、その写真も発表した。当時ソグド語研究はようやく端緒に就いたばかりであった。しかも解読されていた文書の大半は8世紀以降のものであった。これらの手紙はそれらより遙かに古く、書体も言語も8世紀以降のソグド語とは相当異なっているから、Reicheltがこの時点で、曲がりなりにもこれらの手紙を解読できたのは驚嘆すべき偉業であった。実際、本稿で扱う書簡IIを除く残りの手紙は、実に21世紀になるまで改訂版が出されることはなかった。

Reicheltの研究を書評したP. Pelliot（1931）は、これらの手紙の内の2通目、Ancient Letter II（古代書簡II）に皇帝が洛陽を放棄したとあることに注目

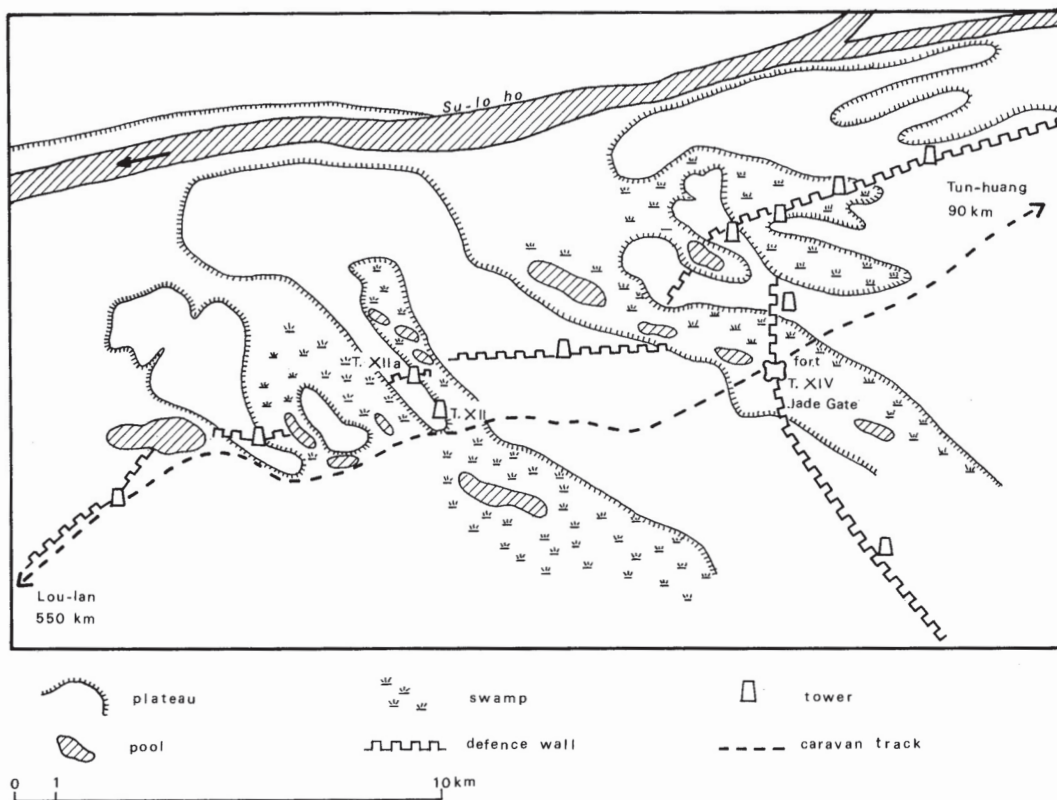


図1：Grenet and Sims-Williams（1987, p. 122, Fig. 3）

し、後漢の終わりの事件との関連を指摘した。その後、1948年にW. B. Henningは“The date of the Sogdian Ancient Letters”と題する論文を発表し、古代書簡IIのなかの、年代比定に役立つと考えられる部分を解説しなおし、手紙が書かれた年代を改めて研究した。歴史上皇帝が洛陽を放棄した事件は3つあって、Pelliotが言及した後漢末の190年に董卓が献帝を長安に連れ去ったとき、西晋の永嘉の乱の間の311年に懷帝が逃走した時、そして北魏時代の534年に孝武帝が関中の宇文泰の元に逃走した時である。Henningはそれら時代の事件と古代書簡IIの内容を比較した上で、ぴったり対応するのは311年でしかあり得ないことを証明した。例えば、書簡には洛陽も鄴もなくなったとあり、鄴が洛陽に匹敵する大都市であったことが知られるが、190年頃の鄴は洛陽に匹敵する都市にはなっていない。鄴が洛陽に匹敵する大都市であり、しかもそこが壊滅したのは307年に汲桑が略奪の後ここに火を放った時であった。一方534年の頃は、鄴が洛陽に代わって繁栄し始めるころであった。

これで古代書簡の年代問題に決着がついたかに見えるが、異を唱える研究者もいた。我が国の藤枝晃（1971, 講談社学術文庫版 1999, p. 168）は、敦煌文書をはじめとする西域出土の中国紙を実見した経験から、古代書簡の紙は4世紀はじめの紙としては上質で薄すぎるとして、4世紀より後の時代に属するとした。洛陽から天子が逃げ出すような事件は他にも少なからず起きているとも言っている。藤枝の年代比定案は、『文字の文化史』という、一般向けの学術書の中でエピソード的に触れているだけで、学術的な論証を伴ったものではなかった。⁵⁾それでも1976年の段階で護雅夫は、やはり一般向けの新書の中で、この藤枝の年代比定とHenningのそれを比較してどちらを採用すべきか自分では判断できないと述べている、護（1976, p. 176）。これが当時、漢文史料に精通するだけでなく、西欧で行われていた研究にも目配りすることができた、日本の最も上質の東洋史学者の対応だった。

1976年になって、ハンガリーのイラン語文献学者のJ. Harmattaは、古代書簡IIの全文を翻訳し直した上で、Henningの説を退け、後漢末説を改めて支持した、Harmatta（1979）。その根拠は烽火台の遺跡で古代書簡と併出する文字資料が漢代の木簡であることで、それらの年代に近づけようとしたの

であった。Harmatta（1979a）はまた古代書簡IIの新しいテキストと翻訳を提出したが、独自の翻訳を支持する注釈を一切提出していないという点で、学術的な研究としては大きな問題があった。ただ古代書簡が未開封のまま放置されていたのは、手紙を運んでいたソグド商人が烽火台で警備に当たっていた中国人兵士に取り上げられ、放棄されたものとするHarmattaの説明は、説得力があるものとして一般に受け入れられている。

こうして、Harmattaの論文以降、古代書簡の年代問題はいったん振り出しに戻った観があった。しかし、1987年になって、イラン学者でイスラム以前の中央アジアの考古学が専門のF. Grenetとソグド語学者のN. Sims-Williamsが共同で論文を発表し、皇帝が洛陽から逃走した3つの事件と書簡IIの内容を比較して、190年の事件や534年の事件とは一致しないことを改めて確認した。また烽火台で出土する文字資料の年代のばらつきを精査して、古代書簡の年代は併出する資料とは関連付けられないことも示している。料紙の厚さについては、敦煌文書の紙について造詣の深いフランス人のJ.-P. Drègeの助けを得ている。Drègeはガラス板に挟まれた紙を取り出し厚さを計測した上で、古代書簡の料紙は藤枝が問題にするほど薄くはないことや、知られている4世紀の紙と比較できることを指摘している。

筆者自身はソグド文字が横書きから縦書きに変化する時代を議論するなかで、古代書簡のレイアウトに注目した、Yoshida（2013）、吉田（2014）。ちなみにソグド文字は6世紀後半には確実に縦書きになっていた。古代書簡では書簡IIを除いて、すべて一見すると奇妙なレイアウトに従っている。それは、アケメネス朝時代のアラム文字・アラム語の手紙と同じレイアウトである。右から左に横書きするアラム文字で書かれた手紙は、横長の長方形のパピルスあるいは羊皮紙の中央より右寄りの、右端にいくらかスペースを残す位置から書き始める。行が下端に達すると、残りの部分は右端に残されたスペースに書き足す。その際、料紙を時計回りに90度回転させ、狭い方の辺に沿って書き進める。横長の状態で見ると、右端のスペースに書かれた文字は上から下に進んでいくように見える。ソグド語の古代書簡は1例を除いてすべてこのレイアウトで書かれているので、この時代はまだソグド文字が横書きであったことが分かる。本稿で取り上げる書簡IIは例外で、

縦長の料紙の右上の端から短い辺に沿って相対的に小ぶりの文字で下端までびっしり書いてある。本文は下端の60行目で終わっていて、ウラ面に日付が書かれている。書簡IIが他とは異なるレイアウトで書かれている理由は分かっていないが、情報量の多い手紙を1枚の紙に収めるための特別措置であったように見える。

西暦2000年頃から、古代書簡の改訂版がSims-Williamsおよび共同研究者によって順次提出されていたが、2023年になって全点のテキストと翻訳、訳注、語彙が、古風なソグド語資料の集成であるN. Sims-Williams, *The “Ancient Letters” and other Early Sogdian documents and inscriptions*, London, 2023, pp. 25-62に収録された。そこには古代書簡の年代や歴史的背景を論じるF. Grenet, “Remarks on the historical interpretation of the Ancient Letters”, *ibid.*, pp. 63-69の解説も添えられている。

II. 古代書簡 II の 1-40 行目

古代書簡IIのなかの筆者が問題にする部分を、最近のSims-Williamsのテキストと翻訳 (*Early Sogdian*, pp. 30-39) に沿って見てみよう。古代書簡IIは古代書簡の中では最も長文で、裏に書かれた短い3行分の日付を含めない本文は実に60行から成り立っている。冒頭の5行は手紙の挨拶の定型句である。5行目の残りから40行目までは、中国における交易活動や政治状況の報告であり、残りの部分 (41-60行目) は手紙の送り手がサマルカンドに残した財産の管理と、息子の処遇に関する一種の遺言になっている。筆者の新しい解釈はそのうちでは、25-29行のわずか5行足らずにしか関わらないが、その理解には前後の文脈は必須なので、まずは、1-40行の部分の日本語訳と、そのもとになったSims-Williamsの最新の翻訳を引用する。ただし本稿で問題にする25-29行目は筆者独自の翻訳で、下線を施してある。別にわずかに異なる解釈をした部分には注釈を添えた。なお「⁽¹⁾ 神の如きご主人さま」のような、左肩に添えてある数字は、対応するソグド語のテキストの行数に対応している。ソグド語と日本語の語順の違いから、ソグド語では同じ行の語句が和訳では泣き別れている場合があることは了承されたい。訳文中の「角括弧」は原文では破損している部分であり、(丸括弧) は、適宜補われた意味の補足である。従って

全体は英訳を参考にして筆者が独自に翻訳した形になっていて、ここでの日本語訳をSims-Williamsの解釈と同一視することはできないことには注意されたい。

II-1 日本語訳と英訳

⁽¹⁾ 神の如きご主人さまであるVarzakkさま (と、その父である) Nanaithvarさま (という) Kanakk (家の方々) へ、千回、万回の⁽²⁾ ご挨拶と敬意を、跪いて、ちょうど神々に捧げられたのと同じように (捧げます)。(この手紙はご主人様方⁽³⁾の) 僕である⁽³⁾ Nanaivandakから送られました。⁽⁶⁾そしてご主人様方よ、あなた方が幸福で息災であるのを見る者には (その日は) 良い日です。⁽⁴⁾ご主人様方、あなた方が健勝であると聞き及びまして、我が身が永遠 (に存続するか) のように⁽⁵⁾ (嬉しく) 思います。⁽⁷⁾

⁽⁵⁾ さてご主人様方、Armatsachは酒泉で元気で無事です。Arsachは⁽⁶⁾ 姑臧で元気で無事です。さてご主人様方、(中国) 内地からソグド人がやって来てから3 (或いは「4」?) 年です。⁽⁷⁾私はGhotamsachを (一つの場所に) 住ませ⁽⁸⁾ました。彼は元気で無事です。⁽⁸⁾彼はKuren(a)kに行きました。今はそこから誰も来ていません、それで⁽⁹⁾ (中国) 内地に行ったソグド人たちについて、彼らがどうなっているかとか、⁽¹⁰⁾ どんな民族のところ (或いは「国」) に到達しているのか、⁽⁹⁾ 私は書いてみようと思います (が、できません?)。⁽¹⁰⁾ さてご主人様方、この⁽¹¹⁾ 最後の (或いは「直近の」?) 皇帝は、人々の話では、飢饉のために洛陽から逃げ出して、⁽¹²⁾ その王宮と (洛陽) 城市に火が放たれました。そして⁽¹³⁾ 王宮と城市は「すべて?」⁽⁹⁾ 燃えました。もう洛陽はありませんし、鄴もありません。⁽¹⁴⁾ またこの...は、匈奴たちに...⁽¹⁵⁾ さて彼らは長安「まで攻撃しました (?)」、それで⁽¹⁶⁾ これらの匈奴は、つい昨日まで中国皇帝の隷属者だったのに、⁽¹⁵⁾ この (?) Nainaich⁽¹¹⁾まで、⁽¹⁶⁾ そして鄴まで⁽¹⁵⁾ [保] 持して (?) います。⁽¹⁷⁾ さてご主人様方、私たちには、この残された中国人が⁽¹⁸⁾ この匈奴を、長安から、<この関中 (あるいは「中国」?) から>⁽¹³⁾ 追いつ出すことが出来るのか、あるいはさらに向こうの (?) 民族 (あるいは「国」?) までも⁽¹⁹⁾ 手に入れるのかは⁽¹⁷⁾ 分かりません。⁽¹⁹⁾ さて... サマルカンド出身の自由人が100人います⁽²⁰⁾ <... Dharyanには>40人の男たちが... います。⁽²¹⁾ さてご主人様方、あなた方の...

(22) (中国) 内地から... してから⁽²¹⁾ 3 年になります...⁽²²⁾ 無加工の (生地／糸?)⁽¹⁶⁾...⁽²³⁾ さて敦煌から金城まで... 販売し... 麻布は⁽²⁴⁾ 進んでいます (= 「よく売れます」?)。誰でもあれ無加工の (生地／糸) あるいは毛織物⁽¹⁷⁾で、まだ搬入・搬出⁽¹⁸⁾していないものがあるなら、⁽²⁵⁾ それらを売って... すべて... さてご主人様方、私たちは、⁽²⁶⁾ (つまり) 金城から敦煌にいる者たち (のことですが)、⁽²⁷⁾ このsyskwnyが生きている限り⁽²⁶⁾ 呼吸をされています (= 「生きていられます」)。⁽²⁷⁾ しかし (彼は、) 身体が不自由(?) で、年老いていて⁽²⁸⁾ 死にそうです。もしこの方がいなくなったら、しかし、⁽²⁹⁾ 私たちがどうなるかについて書く⁽²⁸⁾ (心の) 準備は私にはありそうにありません。⁽²⁹⁾ さてご主人様方、もし私があなたに⁽³⁰⁾ この中国 (あるいは「関中」?) がどうなったかについて⁽²⁹⁾ すべての⁽³⁰⁾ 情報を書けば、それはもう悲痛以上です。あなた方には⁽³¹⁾ あちらからの収益は (もう) ありません。さてご主人様方、私が⁽³²⁾ (中国) 内地にSaghrakとFarnaghatを派遣してから⁽³¹⁾ 8 年になります。そして私が彼らから⁽³³⁾ 返事を受け取ってから⁽³²⁾ 3 年になります。彼らは良く(?)... しました。この最後の (= 直近の)⁽³⁴⁾ 不幸が起きてから、彼らがどうなったかについて私は返事を受け取っていません。⁽³⁵⁾ 私はまたくこれで4 年になります>、Artikhuvandakという名前の別の男を送りました。姑臧から⁽³⁶⁾ キャラバンが出発したとき、Ma... (の息子?) であるWakhushakkがいきました。⁽³⁷⁾ 彼らが洛陽に到着すると、そこでは [月支人?] ⁽²⁰⁾ たちも、インド人も、ソグド人たちも、⁽³⁸⁾ みんな飢饉で死んでいました。私はNasyanを敦煌に送りました。⁽³⁹⁾ 彼は外地に出ましたが、(結局は敦煌に) 入りました。そしてまた今私の許しなしに (外地に) 出ました。⁽⁴⁰⁾ 彼には大きな罰が当たりKarachで叩き殺されました。

<41 ~ 60行目は省略>

(ウラ面)⁽⁶¹⁾ この手紙は⁽⁶²⁾ Chirthswan王の13年であったときの⁽⁶³⁾ Taghmich月に認したためられた (原義: 「作られた」⁽²¹⁾)。

参考のためにSims-Williamsの英訳も引用しておく。

¹To the noble lord Varzakk (son of) Nanai-thvar (of the family) Kanakk, a thousand (and) ten thousand (times) blessing (and) ²homage on bended knee, as is offered to

the gods, sent by his servant ³Nanai-vandak. And, sirs, (it is) a good day for him who sees you happy (and) free from illness; ⁴and, sirs, (news of) your (good) health having been heard (by me), I consider myself immortal!

⁵And, sirs, Armat-sach in Jiuquan 酒泉 (is) safe (and) well and Arsach ⁶in Guzang 姑臧 (is) safe (and) well. And, sirs, it is three(?) years since ⁷a Sogdian came from “inside” (i.e. from China). I settled(?) Ghotam-sach, and (he is) safe (and) well. ⁸He has gone to *kwr'ynk*, and now no-one comes from there so that ⁹I might write to you about the Sogdians who went “inside”, how ¹⁰they fared (and) which countries they reached. And, sirs, the ¹¹last emperor—so they say—fled from Luoyang 洛陽 because of the famine, and ¹²fire was set to his palace and to the city, and the ¹³palace was burnt and the city [destroyed]. Luoyang (is) no more, Ye 鄴 (is) no more! ¹⁴Moreover, the ... Huns(?), and they ¹⁵... Khumdan (i.e. Chang'an 長安), so that they hold(?) it(?) ... as far as this(?) ... ¹⁶and as far as Ye—these (same) Huns [who] yesterday were the emperor's (subjects)! ¹⁷And, sirs, we do not know wh[ether] the remaining Chinese ¹⁸were able to expel the Huns [from] Chang'an, from China, or (whether) ¹⁹they (= the Huns) took the country beyond(?). And [... in ... there are] a hundred freemen ²⁰from Samarkand ... [and] in [...] *δry'n* there are forty men. ²¹And, sirs, your [... it is] three years ²²since [... came] from “inside” ... unmade (cloth)(?). And from ²³Dunhuang 敦煌 up to Jincheng 金城 in ... to sell, linen cloth ²⁴is going (= selling well?), and whoever has unmade (cloth)(?) or *raghzak* (which is) not (yet) brought (to market)(?), not (yet) taken, ²⁵[can](?) sell [all](?) of it ... And, sirs, as for us—²⁶whoever dwells (in the region) from Ji[ncheng](?) up to Dunhuang—we (only) survive (lit. “have breath”) ²⁷so long as the ... lives, and (we are) without family(?), both old ²⁸and on the point of death. If this were not (so), [I would] not be ready(?) ²⁹to write to you (about) how we are. And, sirs, if ³⁰I were to write to you everything (about) how China has fared, (it would be) beyond(?) grief: ³¹there is no profit for you (to gain) therefrom. And, sirs, it is eight years since I sent ³²Saghrak and Farn-aghat “inside” and it is three years since I ³³received a reply from there. They were well ... , (but) now, since the last ³⁴evil occurred, I do [not] receive a reply from there (about) how they have fared. ³⁵Moreover, four years ago I sent another man

named Artikhū-vandak. When ³⁶the caravan departed from Guzang, Wakhush[akk] the ... was there, and when ³⁷they reached Luoyang, bo[th the ...] and the Indians and the Sogdians there ³⁸had all died of starvation. [And I] sent Nasyan to Dunhuang, ³⁹and he went “outside” (i.e. out of China) and entered (Dunhuang), (but) now he has gone without (obtaining) permission from me, ⁴⁰and he has (received) a great retribution and was struck dead in the ...

<41～60行目は省略>

(Vesro) ⁶¹This letter was written (lit. “made”) when ⁶²it was the year 13 of Lord Chirih-swan ⁶³in the month of Taghmich.

Ⅲ. 25-29 行目のテキストと翻訳: Sims-Williams の訳と吉田訳の違い

改めて25-29行目の筆者の翻訳とSims-Williamsの英訳、対応するソグド語のテキストも見ておく。

- 25 'HRZY xwt'ynβ m'xnc w'prmw
 26 ZNH w't δ'r(y)mn ZKZY MN k[mzyn]'t δrw'n prm
 'skwt
 27 c'prmw ZYn ZNH syskwny zw't 'HRZY p'pōy 'wβy
 'PZY m'sk
 28 'PZY mrkyn'k 'HRZYn 'YMTw ZNH L' 't 'HRZYβn
 pyšt L' 'm(yn')[w]
 29 np'xšt 'YKZYn m'xnc β'ymnyy

(²⁵) さてご主人様方、私たちは、(²⁶) (つまり) 金城から敦煌にいる者たち (のことですが)、(27) このsyskwnyが生きている限り(²⁶) 呼吸をされています (= 「生きていられます」)。(27) しかし(彼は、) 身体が不自由(?) で、年老いていて(²⁸) 死にそうです。もしこの方がいなくなったら、しかし、(²⁹) 私たちがどうなるかについて書く(²⁸) (心の) 準備が私にはありそうにありません。

And, sirs, as for us—²⁶ whoever dwells (in the region) from Ji[ncheng](?) up to Dunhuang—we (only) survive (lit. “have breath”) ²⁷so long as the ... lives, and (we are) without family(?), both old ²⁸and on the point of death. If this were not (so), [I would] not be ready(?) ²⁹to write to you (about) how we are.

この部分に関する筆者とSims-Williamsの違いは、Sims-Williamsが、「年老いて死にそうな」者が、手紙の書き手とその周辺の人たちと考えるのに対して、筆者は、ソグド商人たちが頼りにしているsyskwnyと呼ばれている人物のことであるとみなす。「はじめに」の部分で指摘したように、西域からやってくる商人たちにとって、この地域の為政者の人となりや、政治的及び軍事的手腕は最大の関心事であったに違いない。「もしこの方がいなくなったら、しかし、私たちがどうなるかについて書く (心の) 準備が私にはありそうにありません」という表現は、倉慈が死んだ時の西域の商人たちの悲痛な様子を思い起こさせる。

西暦301年に、戦乱の続く中国内地からは隔絶されている涼州に、自ら望んで刺史として赴任した張軌 (255-314) は、314年5月に他界するまで、この地域の安定支配によく努力し、その後彼の息子のもとで独立した前涼国の繁栄の基礎を築いたとされる。彼は独自に貨幣まで発行していたほどだった。²⁴ 西晋の末期の混乱時に、内地に援軍や援助物資を送っていたことから、領土内が良く治まっていた、物資も豊富だったことが知られる。このような歴史的背景を考えれば、「このsyskwnyが生きている限り」は、具体的には「張軌が生きている限り」を意味していると考えられるのではないだろうか。古代書簡IIが書かれたとされる313年は、張軌の最晩年であり、確かに「年老いていて死にそう」であっただろう。

p'pōyはここにしか現れない語である。Sims-Williamsは、否定の意味を持つ接頭辞p'-と、「一族」を意味するpδ- との複合語と解釈して、疑問符を添えて“without family”と翻訳する。張軌には彼の後を継いだ息子もいたので、家族がいらないという表現はそぐわない。筆者は、張軌が中風を患っていたことから、そのことと関連する語ではないかと考えた。²⁶ その場合、語源としては、同じ接頭辞p'-と「足」を意味するp'δの組み合わせを考えることができるかもしれない。p'δがpδのように弱化した形式としてはδ(y)βpōy「二足の生き物、人間」が知られている。²⁷ 「足がない」とは、歩行が困難であったことを意味しているであろう。上では「身体が不自由」と意識した。

25-29行目の文脈に関して、Sims-Williamsの理解と筆者の理解のどちらが正しいか俄に決められない

ように思う。ただし手紙の書き手は、遺言状とも言える41行目以降の55-56行目に、自身の死の可能性について述べており、ここで、同じことを述べるのはいくらか不思議でもある。結局、27行目のZNH syskwnyの意味が問題になる。筆者の推定が正しいとすれば、syskwnyは固有名詞ではなく、張軌が帯びていた称号や尊称、ニックネームであったであろう。『晋書』などの漢籍史料から張軌の経歴を見ると、syskwnyに近い発音の称号として、彼が「司空」の位をすすめられていたことが知られる。そこで以下ではsyskwnyが漢語の「司空」の借用語ないしは音写語であるとする、筆者の仮説について検討する。

IV. 張軌と司空

涼州刺史であった張軌は、内地とは隔絶された河西の地の安定支配に努め、領土内は平和で繁栄していた。その国力によって西晋に援軍や援助物資を送っていたことは上で述べた。そしてその功績を認められて、何度か西晋の皇帝から高い地位と称号が与えられた。今、『晋書』の「張軌伝」を見てみると、以下のような記事がある²⁹⁾：

永寧元年（301）：永寧初、出為護羌校尉、涼州刺史。（『晋書』卷86, p. 2221）

永興二年（305）：永興中・・・惠帝遣加安西將軍、封安樂鄉侯、邑千戶。（『晋書』卷86, p. 2222）；参考：永興二年は『太平御覽』卷124による。

永嘉二年（308）：永嘉初・・・帝嘉其忠、進封西平郡公、不受。（『晋書』卷86, p. 2223）；参考：永嘉二年は『通鑑』卷86による。

永嘉四年（310）：帝遣使者進拜鎮西將軍、都督隴右諸軍事、封霸城侯、（『晋書』卷86, p. 2225）；参考：加涼州刺史張軌安西將軍。（『晋書』卷5、十一月丁丑条, p.121）

永嘉五年（311）：進車騎將軍、開府辟召、儀同三司。策未至、而王彌遂逼洛陽…（『晋書』卷86, p. 2225）

永嘉六年（312）：俄而秦王為皇太子、遣使拜軌為驃騎大將軍、儀同三司、固辭。（『晋書』卷86, p. 2225）；参考：秦王（後の愍帝）が皇太子に就任したのはこの年の9月であった（『晋書』卷5, p. 124）³⁰⁾

建興元年（313）：愍帝即位、進位司空、固讓。（『晋書』卷86, p. 2226）；参考：愍帝の即位は『通鑑』卷88によれば四月壬申のことであった。

建興二年（314）：帝遣大鴻臚辛攀拜軌侍中、太尉、涼州牧、西平公、軌又固辭。（『晋書』卷86, p.2226）；参考：『通鑑』卷89によれば二月壬寅のことであった。

このうち古代書簡が書かれたとされる西暦312-313年頃の記事のなかでは、懷帝が死んで愍帝が即位した建興元年（313）四月壬申に司空の位が与えられたことは注目される。張軌は固辞（固讓）したとあるが、この知らせは張軌がいた姑臧に届いたに違いない。Karlgren (1957) によれば、司空の中古音は*si k'ung、上古音は*sieg k'ungである。筆者は27行目のsyskwnyは、この司空のソグド文字による音写である可能性を考えてみた。Karlgrenの再構形とは一致しないが、「司」は上古音では子音終わりであったと推定されていることは注目される。語末の-yは男性単数主格の活用語尾であろう。漢語の-ng = [-ŋ]が-nで表記されることは、金城 kmzynの城 (zyn；上古音*diěng、中古音*ziāng) に類例がある。古代書簡に見られる漢語の地名表記ではcwcen（酒泉）のcn = 「泉」は中古音とは異なり、上古音を反映している可能性がある。「泉」は中古音では合口呼 (*dziwän) なので、ソグド文字では*cwynと表記されたはずである³³⁾。実際同音の「專」は、中古音を音写した資料であるSo 14830ではcwynと表記されている、吉田 (1994, p. 333)。最近の研究によれば、「泉」は上古音では合口呼ではなく、*dzanのように再建されるというから、ソグド文字表記のcn と良く合う³⁴⁾。

IV-1 prβtm βypwr と古代書簡 II の年代問題

上では、syskwnyが張軌に与えられた位の司空に対応する可能性を指摘した。それが与えられたのは愍帝が即位した313年四月のことであった。一方、古代書簡のソグド語の言語と書体の古さ、上に翻訳した古代書簡IIにある、飢饉の発生、皇帝が洛陽から逃走し、洛陽に火が放たれて焼け落ちたとする報告が、西暦311年の永嘉の乱の時の状況に合致することを根拠に、古代書簡の年代を決定したのはHenningの功績であった。蛇足ではあるが『晋書』卷5, pp. 122-123の、永嘉五年（311）の懷帝に関連

する記事を引用し、古代書簡IIの記事と合致する部分に下線を施した：

五月、・・・東海王越之出也、使河南尹潘滔居守。大將軍苟晞表遷都倉垣、帝將從之、諸大臣畏滔、不敢奉詔、且宮中及黃門戀資財、不欲出。至是饑甚、人相食、百官流亡者十八九。帝召羣臣會議、將行而警衛不備。帝撫手歎曰：「如何曾無車輿！」乃使司徒傅祗出詣河陰、修理舟楫、為水行之備、朝士數十人導從。帝步出西掖門、至銅駝街、為盜所掠、不得進而還。

六月癸未、劉曜、王彌、石勒同寇洛川、王師頻為賊所敗、死者甚眾。庚寅、司空苟藩、光祿大夫苟組奔轅轅、太子左率溫畿夜開廣莫門奔小平津。丁酉、劉曜、王彌入京師。帝開華林園門、出河陰藕池、欲幸長安、為曜等所迫及。曜等遂焚燒宮廟、・・・帝蒙塵于平陽、劉聰以帝為會稽公。・・・百姓饑饉、米斛萬餘價。

このように書簡II、11行目の、Sims-WilliamsやHenningが“the last emperor”³⁵⁾と翻訳するprβtm βypwrは、永嘉の乱の時に洛陽から逃走した懷帝をさすことになる。この皇帝は、313年二月丁未（一日；ユリウス暦3月14日）に殺害されている。Henningは、古代書簡IIが書かれた段階で、書き手は懷帝の殺害についての情報を得ていないと考えており（Henning 1948, p. 614）³⁶⁾、prβtm βypwrはその時までには即位していた西晋の皇帝の中では最後の皇帝である懷帝を指すと考えているが、筆者の「syskwny = 司空」仮説に従えば、当時即位していたのは懷帝ではなく愍帝であった。つまりソグド語のprβtm βypwr “the last emperor”は、同時代に即位している皇帝の直前の皇帝を指すのか、即位している皇帝を指すのかで、解釈が異なることになる。言い換えれば、prβtm βypwrが即位中の皇帝を指示するなら、およそ「syskwny = 司空」仮説は成り立たない。

ソグド語の単語のprβtmの精確な意味が改めて問題になる。Sims-Williams (1986, p. 417) によれば、prβtmの語源は*parama-tamaでprama- “furthest, extreme, last; utmost limit, end”の最上級だとしている。おおよその意味は、「究極の、ultimate」であろうか。prβtmという語は古代書簡IIを除けば、仏典にだけ現れており、原典の漢文仏典の対応する漢語は「究竟、畢竟」³⁷⁾である。残念ながらこの漢語の原語の表現は、当面の問題の解決には使えないように

見える。英語のlastについて言えば、清朝の最後の皇帝のように、歴史的に見て最後の皇帝となった人物をthe last emperorと呼ぶことは出来ようが、後継者が想定される場合に、同時代の皇帝をthe last emperorと呼ぶことは出来ないだろう。このように、過去から将来へ引き継がれていくことが想定される連鎖の中の事物を指し示す際のlastの使い方としては、last week「先週」のような表現が想起される。実際last presidentは「先の大統領」の意味で使われている。prβtmにもそのような用法があったと想定できるのではないだろうか。逆に言えば、古代書簡IIの書き手は、懷帝で西晋王朝が滅亡するとは決して考えていなかったはずであり、懷帝を「最後の皇帝」とは決して呼ばなかったはずである。

要するに筆者は、文脈の中では確実に懷帝を指示するprβtm βypwrは、「先の（直近の）皇帝」の意味であって、313年の四月に即位した次の皇帝である愍帝の時代の表現ではないかと考える。また古代書簡IIのなかのもう一つのprβtmの例は、33-34行目のprβtm βyzで、Henningは“the last débâcle”、Sims-Williamsは“the last evil”と訳している。βyz-「不幸、災難、禍」も、過去から将来にわたって何度でも発生するものであるから、この場合も、「直近の災難」のことを言っていることになるだろう。313年に手紙を書いている段階での「直近の災難、禍」は、311年の洛陽陥落事件のことであろう。そうすれば、30-34行目の部分は、具体的には、313年から数えて8年前（305/306年）に河西からSaghrakとFarnaghatを中国内地に送り出し、3年前（310/311年）に手紙を受け取ったときには、まだ洛陽陥落の前で、うまくやっている様子だったが、「この最後の（＝直近の）不幸が起きてから、彼らがどうなったかについて私は手紙を受け取っていません」と言うことではないだろうか。

V. 古代書簡の日付と司空の位が与えられた日付との関係

ここで古代書簡の日付を見てみよう。サマルカンドに送られた古代書簡II以外は、中国暦に従い、月と日だけが指定されている。年の指定がないのは、宛先が近く、宛先に到達するのに日数がかからないためだと考えられるが、それはまた同じ（タイプの）暦を使っている地域間のやりとりであったことをも

示唆する。これらは一般には楼蘭にいる受取人に向けて送られたものと推定されていて、その推定に問題はない。実際楼蘭でも、古代書簡と同じ時期の手紙の断片が出土していて、*Early Sogdian*, pp. 71-81 にテキストと翻訳が提出されている。

下に当時の中国暦の日付に対応する西暦（ユリウス暦）の日付を添えた。2種類あるが、はじめのものはHenningが割り出した日付で、後のものは、その翌年の場合を想定した日付で筆者が加えた。推定される年は、ユリウス暦312年あるいは313年の場合（古代書簡IV）、及び313年あるいは314年の場合（古代書簡III, V）である。

古代書簡 I：日付なし（ただし、この手紙の差出人は古代書簡IIIと同一人物）

古代書簡 II：cyrδsw'n王の13年tym'yc月³⁹⁾（西暦312～315年では、ユリウス暦の6月6日から7月5日に対応する）；手紙が書かれた場所不明（Henningはcyrδsw'nを「酒泉」の音写と理解して、酒泉で書かれたと考えたが、この同定は後に否定された。Grenetは張掖を推定する⁴¹⁾）

古代書簡 III：三月十日（ユリウス暦313年4月21日／314年4月10日⁴²⁾）；敦煌で書かれた

古代書簡 IV：十月十五日（ユリウス暦312年11月30日／313年11月19日⁴³⁾）；手紙が書かれた場所不明（Grenetは酒泉を推定する⁴⁴⁾）

古代書簡 V：三月三十日（ユリウス暦313年5月11日／314年4月30日）；姑臧で書かれた

古代書簡 VI：某月二十六日；手紙が書かれた場所不明（Grenetは敦煌を推定する⁴⁵⁾）

古代書簡 VII：某月十五日；手紙が書かれた場所不明

古代書簡 VIII：日付部分は破損；何処で書かれたかも不明

prβtm βypwrが「直前の皇帝」を意味するという推定と、syskwnyが「司空」に対応し、それが張軌に与えられた位であって、この文脈では張軌自身を意味しているという推定が正しいと仮定してみよう。古代書簡IIは永嘉の乱（西暦311年中国暦の6月）の情報を取り込んでいることから、その情報が伝わる時間を考慮して、Henningは西暦312年ないし313年に書かれたと推測している。ただし、上で論じたprβtm βypwr問題や、張軌に司空の位が与えられた年を考慮すれば、この書簡が書かれたのは愍帝

の313年の即位以降でしかあり得ないので、312年の可能性は排除される。ところでソグドのtym'yc月と、中国暦とを比べると以下のようになっている。なお基本的にササン朝のゾロアスター教暦と同じシステムのソグドの暦については吉田（2022, pp. 435-437）を参照されたい：

311年では中国暦の五月五日から六月四日まで

312年では中国暦の四月十六日から五月十五日まで

313年では中国暦の四月二十六日から五月二十六日まで

314年では中国暦の五月七日から六月七日まで

愍帝が即位したのは313年の中国暦の四月壬申（＝二十七日）で、その年のtym'yc月の第2日（ソグド語名は'xwmn'rawc）に当たる。当時愍帝は長安にいたので、そこからその知らせが届けられたはずの張軌がいた涼州姑臧までの距離も問題になる。玄奘が長安を出発した年次を検討した荒川正晴の研究（荒川 2023, pp. 15-16）によれば、唐の記録では長安と姑臧の間の旅程は2000里であると言う。そしてこの距離は、馬行では一ヶ月以内に移動できるという。かりに古代書簡IIの差出人であるNanaivandakが姑臧に滞在していたとしたら、あるいはさらに長安に近い金城に滞在していたとしたら、tym'yc月の間にそのニュースに接することが出来たであろう。ただし姑臧にいる場合は、あまり日数に余裕はない。

また翌年の314年に古代書簡IIが書かれたとすると、ニュースが届く時期は問題にならないが、その年に張軌は死んでいるのでその時期が問題になる。張軌が死亡した日付は『通鑑』と『晋書』では異なっている。『通鑑』にそえられた司馬光の『資治通鑑考異』によれば『前涼録抄』には己丑とあるという：

夏、五月、西平武穆公張軌寢疾、遺令：「文武將佐、務安百姓、上思報國、下以寧家。」己丑、軌薨（『通鑑』卷89, p. 2815）

五月壬辰、太尉、領護羌校尉、涼州刺史、西平公張軌薨（『晋書』卷5, p. 128）

314年五月の己丑は中国暦の五月二十日（tym'yc月の第14日；ユリウス暦の6月19日）、壬辰は二十三日（tym'yc月の第17日；ユリウス暦の6月22日）で

⁴⁶⁾ある。いずれもtym'yc月であり、その中頃に張軌は死んだことになるので、古代書簡IIがtym'yc月の前半に書かれていれば、張軌は死の直前とは言え、まだ生きていたことになる。

Ⅶ. ここまでのまとめと「syskwny = 使君」の可能性

上で提示した筆者の仮説は、古代書簡IIは、華北の他の地域と違い比較的平穏で繁栄していた河西の「張軌王国」(すなわち後の前凉)に拠点を置くソグド商人の目線で、華北の313年頃の事態を報告しているという前提に基づいている。その際彼らは、彼らのネットワークを通じて入ってくる情報と、絶え間なく内地から流入する難民から得られる情報によっていたであろう。筆者の新提案の出発点は、25-29行目の謎のパッセージが、当時最晩年にあって中風を患っていた涼州刺史の張軌が、すぐにも死ぬのではないかとという懸念の表明であるという想定であった。筆者の想定が正しければ、27行目のZNH syskwnyは、張軌その人を指すことになるはずである。筆者は、張軌は晩年、即位したばかりの愍帝から、張軌自身は辞退したものの、司空の位がすすめられていることから、syskwnyは「司空」という称号の借用(あるいは音写)形であるという仮説を提案した。そして手紙の内容から懷帝を指していることが証明されているprβtm βypwrというソグド語表現は、「先の中国皇帝」を意味すると推定した。筆者の仮説や推定が正しければ、書簡IIは愍帝が313年四月に即位した後に書かれたことになる。その一方で張軌は314年五月に他界するので、書簡IIが書かれた年代はそれ以前に絞り込まれる。書簡IIはソグド暦のtym'yc月に書かれており、313年あるいは314年のtym'yc月に書かれた手紙として、司空の位がすすめられたタイミングや、張軌が他界した日付と矛盾がないかどうかについて検討した。その結果、313年の場合も314年の場合も、かろうじて不可能ではないという結論に至った。

それにしても、「かろうじて不可能ではない」というのは、わずかの日数の期間でのみ可能であったということで、説得力に乏しいことは重々承知している。syskwnyは張軌を指しているという、筆者のそもそもの想定が正しいとすれば、syskwnyは「司空」の借用語・音写語ではなく別の意味の語であるという可能性を考慮すべきかもしれない。また、「syskwny

= 司空」仮説を維持するのなら、張軌が313年四月以前から司空と呼ばれていた可能性も考えるべきかもしれない。実際、上記注30に述べたように、312年に司空が与えられたという史料も残されている。張軌は311年の段階で儀同三司という、名目上ではあるが司空に匹敵する散官を与えられているので、そのことをもって、河西の一般民衆の間で、張軌は愛着を込めて「司空さま」のあだ名で呼ばれていたのかもしれない。また注28で言及した荒川氏の指摘も参照せよ。たしかに、書簡IIの文言からは、受取人もsyskwnyが誰を指しているのか容易に特定できることを前提にしているように見える。

syskwnyの意味や原語に関して筆者としてはこのように行き詰まった状況の中、峰雪幸人博士は、本稿の前段階の原稿を読み、syskwnyが張軌を指す語なら、刺史の尊称である「使君」の借用語(音写語)である可能性があるのではないかと指摘して下さった。Karlgren (1957)によれば「使君」の中古音は*ši kiwənであり、初頭音にはソグド文字のš-が期待されるので、一見すると成立しない仮説である。しかし上古音はKarlgrenによれば*sljæg kiwənであり、s-で始まっている。藤堂明保が監修した『学研漢和大辞典』東京1978も「使」の上古音として*sljægを再建している。インターネット上で公開されているBaxter-Sagart Old Chinese reconstruction (version 1.1, 20 September 2014)では*s-rəʔ-sと再建する。しかも「使い、使者」を意味する「使」が去声であることから、末尾に-sを想定している。上でも述べたように、中古音とは異なり、上古音の再構形は研究者の間で今なおコンセンサスが得られていない状況で、門外漢には利用が難しい。ただ「使」の初頭音に関する限り、ソグド文字ではšと表記される歯茎硬口蓋音ないしそり舌音ではなく、歯音の*s-であったという点では3つの再建形は一致している。

書簡IIが書かれていた時点で、張軌が301年に涼州刺史に就任して以来10年以上経っていたはずなので、張軌、すなわち河西の「使君」に関する高い評価はサマルカンドにいた受取人たちの間でも良く知られていたに違いないから、峰雪博士の指摘のほうに当たっているように思われる。なお、prβtm βypwrが「直前の皇帝」を意味するという推定が成立する限り、書簡IIは愍帝の即位(313年四月)以降に書かれたという想定は成立する。

VII. その他の問題

Henningは古代書簡IIの日付の部分に現れる *cyrδsw'n* を酒泉の音写と考えて、*cyrδsw'n MR'Y 13 srδ wm'tw* 「酒泉の領主の13年であった」と翻訳した。一方、書簡IIを内容の検討から313年に書かれたと考えたので、301年に支配を始めた酒泉領主として、301年に涼州刺史に就任した張軌を推定した。その13年目は確かに313年で、その限りでは見事と言うしかない仮説であった。しかし、酒泉は書簡IIには *cwcn* という表記で5行目に現れていることを Harmatta (1979a, p. 164) が示し、こちらの比定が現在は受け入れられている。また、サマルカンドに向けて送られた手紙の日付部分に現れる支配者 *cyrδsw'n MR'Y* の *cyrδsw'n* は、Sims-Williamsが論証しているように、ソグド語の人名に現れる要素 (*cyrδ < *čiōra + sw'n < *savāna*) の組み合わせとして自然であることが示された、Grenet and Sims-Williams (1987, pp. 114-115)。この間にインダス川上流の岩壁銘文の発見と、それらに対するSims-Williamsの研究によって、ソグド語の人名のコーパスは飛躍的に拡大していて、*cyrδ* を含む人名が知られるようになった、Lurje (2010, p. 171)。

結局、現在では、古代書簡IIが書かれた当時のサマルカンド王の名前が *cyrδsw'n* であったと信じられていて、その理解に何ら問題はない。ただこの一連の古代書簡IIに関する研究の中で、河西にいわば独立国を建設して、その後の前涼の基礎を造った張軌の事績と、この地に定住し、ここをシルクロード交易の中国での拠点としていたソグド商人との関係が、Henning以降の研究者によって全く注目されなくなったのは残念なことであった。書簡の25-29行目が、当時最晩年にあった涼州刺史張軌の健康状態についての懸念を伝えているとする筆者の仮説が正しいとすると、河西にいたソグド商人たちは彼の恩恵を強く意識していたのであり、彼のおかげで河西は確かに中国の他の地方に比べて遙かに平穏で繁栄していたらしい。おそらく張軌は東西交易についてもその重要性を理解し、それを支援していたに違いない。この時期、河西も含めて中国全体は動乱⁴⁷⁾ していて、ソグド商人たちの交易活動にも大きな支障があったというような紋切り型の議論 (Grenet, *ibid.*, p. 65) は、こと河西に関する限り成り立たないであろう。従って、書簡の日付のばらつきを、河西での移

動が困難であったことと関連付けることは受け入れられないであろう。

河西に独立していた張軌政権についてのこのような歴史的な背景を考慮すれば、古代書簡が、国境警備の兵士たちによってチェックされて没収され、内容を理解できないために捨てられたというような安易な想定も必ずしも受け入れられない。シルクロード交易はむしろ張軌によって推奨されていたに違いないから、古代書簡を運んでいたソグド商人たちが遭遇した不測の事態は、強盗・追い剥ぎの類であろう。書簡IIにある「私はNasyanを敦煌に送りました。⁽³⁹⁾彼は外地に出ましたが、(結局は敦煌に)入りました。そしてまた今、私の許しなしに(外地に)出しました。⁽⁴⁰⁾彼には大きな罰が当たりKarachで叩き殺されました。」なども、313-314年当時敦煌までは張軌政権の支配が及ぶ範囲であって、⁴⁸⁾ その領域内は安全だが、そこから外地に出る事には大きなリスクがあったことを示しているのであろう。実際、古代書簡VIの5行目では、「外地」と表現される地域には楼蘭が含まれていることは注目される。

VII-1 古代書簡に見られるいくつかの表現・語彙の歴史的背景について

古代書簡にはシルクロード交易にかかわるいろいろな重要な語彙が残されている。筆者が発見した *s'rt'p'w* はその代表だろう。シルクロード史研究の中で、唐代の薩宝 (北齊: 薩甫、北周・隋: 薩保) は重要なキーワードであるが、そのソグド語の原語は長らく不明であった。筆者が古代書簡Vの宛先部分に *s'rt'p'w* を発見したことによって、原語と原義がはじめて確定した。唐の時代の薩宝に関する『通典』巻40職官22の記事によって、祇教との関係ばかりが注目されていた薩宝は、本来キャラバンのリーダーを意味していて、ソグド商人たちの首領を意味する語であることが始めて理解された。一方で近年北朝期の薩保の墓が発見され、残された墓誌や薩保の生涯を描いたレリーフから、必ずしもキャラバンのリーダーに限定されない軍事活動も注目されるようになった。*s'rt'p'w* の性格が4世紀初頭の古代書簡の時期と、6世紀後半の北朝期⁴⁹⁾ とで異なっていたのかも興味深い問題である。

Nanaivandakが比較的迅速に中国の情勢について知り得た点に関しては、11行目の *m'δ w'β'nt* 「人々が言う (ところによれば)」に見られる、難民が伝え

る噂も無視できないのではないだろうか。『晋書』「張軌伝」巻86, p. 2225では、311年の洛陽陥落の記事に続けて、以下のように書いている：

中州避難來者日月相繼、分武威置武興郡以居之

武威（姑臧）にやってきた難民たちは内地についての一定の情報や噂を知っていたに違いない。ここに見える「中州」こそは、書簡の中のcntry「(中国) 内部」に当たっているのであろう。戦乱が続く内地と対照されているのは、比較的平穏であった河西地域であったと考えられよう。そして7行目の'HRZYm prš(s)t γwtms'c「私はGhotamsachを（一つの場所に）住ませ（？）ました。」は、Ghotamsachを河西地域に留めて、中国内地には行かせないことにしたと言っているのかもしれない。その場合、直後の'HRZY 't kwr'y'nyk s'r wyt'rt「彼はKwr'y'nykに行きました」のKwr'y'nykは河西地域の地名である可能性が出てくる。たいした根拠はないが、筆者はエチナの居延を指しているのではないかと考える。「居延」は、敦煌という漢語の地名が、ギリシア文字でθραονα、ソグド文字ではδρω'nと表記される非漢語の原語の地名に基づいているように、本来の非漢語の地名を、前漢時代に漢字で音写したのではなかろうか。⁵⁰⁾なおKarlsgren (1957) が推定する「延」の上古音は*dian (藤堂は*dian, Baxter-Sagartは*la[n]) であって、古くは舌音の子音で始まっていたことが推測されている。

VII-2 n'p の具体的な意味について

古代書簡IIにn'pという語は10行目と18行目に2回使われている。その二つの箇所と、当該部分の筆者とSims-Williamsの訳を見よう。

10 kt'mw ZYn n'pw p(r)[']yt 'y'nt 「どんな民族のところ（或いは「国」）に到達しているのか」；“(and) which countries they reached”.

18-19 'WZY(n)n ZNH p'r'kw (n)'pw ny's'y'nt 「あるいはさらに向こうの（？）民族（あるいは「国」？）までも⁽¹⁹⁾手に入れるのか」；“or (whether) ¹⁹they (= the Huns) took the country beyond(?)”.

n'pという語は「人民、国人」を意味する一方で、「人民の共同体、民族国家」のような意味を持って

いる。Henning (1948, p. 606, n. 8) は、この語は“tribe, nation, people”を意味し、“country”を意味しないが、ここでは“country”の意味が文脈によく合うと言っている。Sims-Williamsは語彙表ではn'pの意味として“people; country”をあげる一方で、テキストの翻訳ではもっぱら“country”と翻訳している。中国国内で行われている戦争についての報告であるから、n'pは、中国国内の各地方を意味すると考えるのが確かに自然であろう。しかし古代書簡は五胡十六国時代がまさに始まる時期に書かれているので、n'pがそれらの異民族（および異民族が住んでいる地域）を指しているとも考えられる。筆者の訳は、その前提に基づいている。ソグド語には、国内の各地域、地方を指す語として'wt'kという語が存在しているので、筆者の翻訳も十分に考慮に値するであろう。

18行目の場合は、ny's'y'ntの主語も問題になる。Sims-Williamsは匈奴が主語だと考えて翻訳している。筆者はHenningに従って、先行する文の主語ZNH wy'pryt'kw cyn「この残された中国人」が、ここでも主語になっていると考えた。さらに動詞の時制についても考える必要がある。永嘉の乱の後、311年の内に長安は、いったんは反乱軍の前に陥落したが、その後懷帝の後を継ぐことになる皇太子の司馬鄴（313年に即位した愍帝）は、312年に長安を奪回する。316年に愍帝が虜になるまで、長安及び関中平野をめぐる双方は戦闘を繰り返していた。313年（あるいは314年）に書簡IIが書かれている時には、愍帝が勝利して西晋を復興させるか、漢軍（前趙軍）の軍門に降るかは予想できない状況にあったのではなかろうか。その意味では、ny's'y'ntおよび先行するškrw wn'y'nt「(関中から) 追い出すことが出来るのか」に見られる希求法形は、過去を表す希求法ではなく、不確定（想定）を示す希求法の用例と考えることもできよう。「さらに向こうの民族」は、関中平野の外側の異民族たちを指示していると考えて翻訳した。

この部分の翻訳では、筆者の翻訳の方が取り立てて優れているわけではない。ただし、ソグド語を専門としない歴史学の研究者には、Sims-WilliamsやHenningの翻訳とは異なる解釈も可能であることは理解しにくいと思われる。この時代の歴史に詳しい研究者にいろいろな解釈の可能性を提示して、当時の歴史的状況に最も良く合致する解釈を引き出すことができるように、敢えて筆者の翻訳も提示してみ

た。

VII-3 商品名について

古代書簡の中で言及される商品には以下のようなものがあるとされる⁵¹⁾：

書簡Ⅱ：kynpwy'n'k δβ'n'k「麻布」、L' krth/n'krth「無加工品(?)」、rγzk「毛織物(?)」、yxs-「麝香」

書簡Ⅳ：zyrn「金」、rwδk「青銅貨」、tryh「内臓結石」、mδ-「ワイン」、pty'δ「カップ」

書簡Ⅴ：'sptyc「白檀」、pδ'pδ[]h「胡椒」、n(••y)t「?」、rysk「?」、n'krth「銀」、'st(k)[](m)「?」

書簡Ⅵ：šδyh「?」、pyrcyk「絹(糸)」、kprwh「樟脳」

書簡Ⅶ："δwkh「穀物」

古代書簡には従来「絹」を意味する語が見つからないとされていたが(de la Vaissière, 影山訳, p. 41)、後にSims-Williamsによって古代書簡Ⅵに見えるpyrcykが、「絹」を表す語であることが発見された⁵²⁾。その書簡では楼蘭に行ってpyrcykを買うように命令されているように見える。ただし中国国外の楼蘭で絹を購入するというのは奇妙で、Grenetは中国国内で入手が難しかった絹を、在庫が貯蔵されている楼蘭で入手するというような背景を想定している。し

かし、上でも述べたように河西には物資が豊富にあったようなので、わざわざ楼蘭まで行って絹を購入したとは考えられないのではないか。与えられた指示は、楼蘭に行く前の河西でšδyh「?」を売って絹を買い、その絹を元手にして楼蘭で商業活動を行うというものではなかったのだろうか。

古代書簡の中で言及されるpyrcyk以外の物品についても見てみよう。古代書簡Ⅳにはrwδkという語が見える。「銅」を意味するrwδから派生した語で、銅貨(実際は青銅)を意味すると考えられている、Grenet and Sims-Williams (1987, pp. 113-114)。上でも述べたように張軌は貨幣を発行していたので⁵³⁾、ここで問題になっているrwδkは張軌が発行したばかりの硬貨だったのかもしれない。書簡Ⅳには金でrwδkを800枚買うとある。前涼の貨幣は2g程度であったらしいから、1,600gの青銅を手に入れたことになる。金と銅との交換レートが1:300程度であったすれば、ソリドゥス金貨1枚分ほどになる。

シルクロード上の商品の流れとして、中国で生産される絹は東から西に向かうが、大半の物品は西から東に向かう⁵⁴⁾。従って、書簡Ⅴの中で、姑臧で発送の準備が出来ているというiiii βnt 'sptyc「4束の白いもの」⁵⁵⁾及びpδ'pδ[]h ii 1LP iiiii 100「胡椒2500(房?)」は中国内地に向けて発送されるものであったに違い



図2：Sha Wutian (2024, p. 260, Fig. 8.2)

ない。Grenetが西方に向かうとするのは誤りであろう。⁵⁶⁾ 筆者が推定するように、「4束の白いもの」が香木を束にしたもの4束を表しているとする、1本の香木は法隆寺の白檀の香木と同じように長さ60センチ程度、重さ3～6キロ程度であったのかもしれない、東野（1988, pp. 4-10）。⁵⁷⁾ 盛唐の時代の敦煌壁画には、山中で盗賊に襲われるソグド商人の絵がある。商人たちが盗賊に差し出している商品には、10本ばかりを紐で結んで束にした香木が見える。その香木は白く描かれていて、白檀の香木であったと推定される、荒川2019（図2）。二瘤駱駝に香木を積んで移動しているソグド人の姿を描いた唐代の墓壁画も見つかっている（図3）。Sha（2024, pp. 259-260 fig. 8.2, 299-301 fig. 8.24）が、これらを絹織物であるとするのは誤りであろう。

従来商品のリストには入っていないが、書簡VII⁵⁸⁾ に見える200 myδ'mβn "δwkh「穀物」が注目される。日常生活の食料であるので、シルクロード交易の商品とみなされていないのであろう。myδ'mβnはギリシア語の液量単位μεδιμνοςからの借用語で、1 μεδιμνοςは51リットルほどなので、全体で10,000リットル、唐の時代の液量で計算すれば170石ほどである、吉田（1988, p. 172）。この量の穀物は、駐留軍



図3：Sha Wutian（2024, p. 301, Fig. 8.24）

に納入する規模のものであろうから、これもまたソグド商人の交易活動の一環と見なさなければならない。⁵⁹⁾ この種の運送業は、唐の時代のソグド商人も行っており、4世紀の段階でも行われていたことが知られる。実際この時代の楼蘭出土木簡のL.A. I. iii. 1には、このことを示唆するような文言が見える、榮新江（2001, pp. 27-28）。⁶⁰⁾

建興十八年（330）三月十七日粟特胡樓蘭一萬石錢二百

ソグド商人（粟特胡）が、楼蘭で一万石の穀物を納入したということであろうか、具体的な内容は不明だが参考になる史料である。

VIII. おわりに

本稿では古代書簡IIの25-29行目について、Sims-Williams（2023）とは異なる解釈を提案し、手紙の書き手が居住している河西回廊とそこでの商業活動の将来が、当時の河西の支配者の健康状態と寿命に依存していることを伝えている文脈であると提案した。要点は27行目にあるZNH syskwyny「こちらのsyskwyny」が、当時河西の支配者であった涼州刺史の張軌（255-324）を指しているという主張である。

そのsyskwynyは張軌の名前ではあり得ないので、筆者は彼の称号ないしはニックネームだと推定した。張軌に関わる称号の中ではsyskwynyに発音が近いものとして司空が想定される。司空の位は、典籍史料では313年四月に張軌にすすめられた。張軌は固辞したというが、周囲の人たちが張軌を「司空」と呼んでいた可能性はあると考えて、手紙が書かれた時期と「司空」の位が与えられ、それを伝える使者が涼州に到着する時期と、手紙が書かれた時期の間で矛盾がないかを検討し、かろうじて不可能ではないことを指摘した。ただ、それにしても時間的な余裕があまりに少ないだけでなく、書簡の受取人たちが、syskwynyが「司空」を指すことを理解できたかどうかには大きな不安があった。

この筆者の提案に対して、峰雪博士は、張軌が帯びていた刺史の尊称が「使君」であることから、syskwnyは「使君」に対応しているのではないかと指摘してくださった。その指摘を検討した結果、中古音ではそり舌音の*s-で再建されている「使」の声母は、いくつかのこれまで提案されている上古音の再建形に基づけば、上古音では歯音の*s-が再建される。それ故「syskwny = 使君」の比定は成立する可能性があることが判明した。そして書簡の受取人にも諒解されていた点を考慮すれば、ソグド商人たちの間では、すでに301年の段階で、張軌が就任している涼州刺史の尊称である「使君」と呼ばれていた可能性の方が高いであろうと判断した。

古代書簡が書かれた4世紀初めは、中国語の発音としては、中古音以前の上古音が想定される時代である。漢語上古音の再建形は研究者ごとに大きく異なっており、門外漢は容易に利用できないので、syskwnyにどのような漢字を想定するかについては不確定要素が多い。そのことから、筆者の「syskwnyは張軌を指している」という結論そのものも疑わしく思われるかもしれないのは残念であるが、筆者自身は正しいと信じている。

註

- 1) 本稿を執筆するに当たって、漢文史料に関して峰雪幸人博士（日本学術振興会特別研究員PD、東京大学人文社会科学系研究科）から多大な教示を得た。また峰雪博士、荒川正晴大阪大学名誉教授、宮本亮一奈良大学准教授、大竹昌巳京都大学講師、影山悦子名古屋大学准教授は、本稿の原稿を読んで、貴重なコメントをしてくださった。ここに記して謝意を表す。無論、本論文に残る誤りはすべて筆者の責任である。なお、行論上本論文中には多くの漢文史料を引用するが、読み下し文や翻訳は添えていない。東洋史の専門家ではない筆者の手に余る作業で、関連する箇所には下線を施し、その前後の文脈を引用するにとどまっている。
- 2) 「倉慈伝」はシルクロード交易との関連でしばしば引用される：de la Vaissière（影山訳, p. 53）。この箇所と過所との関連は荒川（2010, p. 507）も参照せよ。
- 3) 荒川教授は「夷」は「胡」と異なり、敦煌周辺にいる非漢族を指す可能性を指摘された。
- 4) 森安（2016, p. 120）；de la Vaissière（影山訳, p. 48及び注p. 10, n. 45）も参照せよ。
- 5) 誤解がないように藤枝の文章を引用しておこう：「一九六四年にロンドンを訪れたとき、大英博物館でとくにこれら一群の文書を出してもらった。すべて二枚のガラスで挟んで保存してあったが、どれもきわめて薄手の中国製黄麻紙に書かれてある。黄色もかなり鮮やかである。この手の紙が現れるのは六世紀になってからである。五世紀の麻紙はここまで薄くない。右の文書の年代については、ただ「天子が洛陽を逃げ出した」事件だけが決めてで、他に根拠はない。それだけのことなら五胡十六国の間に何度かあった。注目すべきはガブという地名で、洛陽と並べるからには、北魏の都であった鄴に違いない。それならば、右の手紙は北魏末期の混乱を語った話となり、河陰の変（五二八年）か、東魏の分裂（五三四年）あたりと見れば、文章も通り、紙質とも矛盾しないことになる。たとえ、この比定が間違っただとしても、この紙質は四世紀初めのものではあり得ないことだけは確かである。」奇妙なことに、xwnとして書簡IIに記され、Henningが注目していた匈奴、すなわち前趙（漢）、が果たした役割は完全に無視されている。
- 6) ここでpyšt MN xypō βntk nnyβntk「僕であるNanaivandakから送られた」とあるのは、挨拶（の言葉）や敬意が送られたという意味ではない。そのことは、古代書簡IVの冒頭部で、挨拶や敬意に関するフレーズではなく、宛名の直後にこのフレーズが置かれていることからも理解される。
- 7) 「永遠に存在する」はソグド語の形容詞nwškwの訳語である。nwšはアヴェスタ語のanaōša「不死の飲み物」に由来し、ゾロアスター教の天国に入った正義の人が口にする飲み物であった。従って原義は「我が身が天国にあるように思う」であったのだろう。
- 8) 不明の地名。筆者の提案については下記も参照。
- 9) w(y)[sph] ? Sims-Williamsは、“destroyed”と翻訳しているが、当該部分をw(y)[]として復元案を提出しない。Henningはw(y)[knt]「破壊された」と復元する。
- 10) Henningは、“Moreover then the [emperor was taken prisoner and led into captivity] by the [Hu]ns”と補う可能性を指摘している。Sims-Williamsは復元案を提出しない。
- 11) 不明の地名。Reichelt, Sims-Williamsはn'yn'ychと読む。Henningはn'yn'ymh, z'yz'ychなどと読んでいる。また最後から2番目の文字は'のようにも読めるとする。
- 12) Henningはcynstnを秦の領域、すなわち「関中」を意味すると考えている。Sims-Williamsは単にChinaと翻訳している。この点については下記も参照せよ。
- 13) <>内は行間に挿入された部分であることを示す。以下同様。
- 14) HenningとSims-Williamsは希求法過去形で訳している：“were able to drive (NSW: were able to expel)”。
- 15) HenningとSims-Williamsは希求法過去形で訳している：“or occupied their other land (NSW: they (the Huns) took the country beyond)”。
- 16) 「無加工の（生地／糸？）」。原文は、(L' k)[r](t)h (l. 22)、(n')kr(t)[h] (l. 24)。読みはほぼ確実で、原義は「作られていない」だが、具体的にどんな商品の名前かよく分からない。生絹のようなものか。

- 17) 原文ryzk raghzak。敦煌出土のTurco-Sogdian文書にryz-があり、毛織物としての「褐子」を意味している、Sims-Williams and Hamilton (2015, p. 30)。Sims-Williamsはこれと関連する語と見なしている。
- 18) 原文は(n'βwrt) (n)' (y)t。Sims-Williamsは指摘していないが、ムグ文書では、動詞 "βr / 'yt 「(原義) 持つてくる」は「搬入」を意味し、"s'yt 「(原義) 取る」は「搬出」を意味している。具体的には買い付けたもののまだ生産者のもとに残っている商品と、未出荷の商品のことであろう。
- 19) 手紙ではこの地名は破損していて、冒頭の文字kだけが残っている。従ってk[mzyn]以外にk[c'n]も復元できる。その場合は「姑臧から敦煌まで」と翻訳される。下でも論じるように、ここは涼州刺史張軌の支配領域（後の前涼）について述べていると考えられる。前田 (1981) によれば、前涼の境界は金城以西なので、k[mzyn]のほうがいいであろう。
- 20) 筆者の復元。上記の「月支、康居胡侯支富、康植等二十餘人（『三国志』巻33、蜀書・後主伝, p. 895）」も参照せよ。バクトリア商人のことで、*txw'r'ktのような語が推定される。HenningもSims-Williamsも復元案を提出しない。なおHenningは'yntkw't「インド人（複数形）」を楼蘭に移住していたインド系の住人であると考えているようだ (Henning 1948, p. 603及び脚注3)。しかしむしろガンダーラ商人であったのではなからうか。
- 21) tym'yc月の月名だけで日付が指定されていないのは不思議である。ソグドの暦は単純な太陽暦なので、月日を割り出すのは容易なはずだが、故郷を離れて何年も経つと、精確な日付までは分からなかったのかもしれない。実際、トルファン出土で、西暦639年に書かれたソグド語の契約文書では、契約の日付は中国式とソグド式の2種類で指定されているものの、中国式では月日が指定されているのに対して、ソグド式では月名だけが指定されている、吉田他 (1988, p. 12)。
- 22) 提示したテキストを見れば分かるように、このパッセージは例外的によく残っている。Henningは古代書簡の年代に関する論文の中で、本稿で扱う古代書簡IIの前半部のテキストと翻訳を提出している。しかし、筆者が本稿で扱う部分が主要な部分になっている23行目の後半から29行目の前半部は、テキストも翻訳も提示していない。その理由は、内容が理解できないことと、年代比定に役立つように見えないからだとしている、Henning (1948, p. 607, n. 10)。しかしながら、下でも述べるように、27行目のsyskwnyが「司空」あるいは「使君」を表しているのなら、これは年代比定の重要なキーワードになる。
- 23) 本稿では中国暦とユリウス暦を区別するために、中国暦の月名と日付は漢数字で表す。
- 24) この点については下註53を参照されたい。
- 25) 『晋書』巻86, p. 2225に、311年洛陽が危機的情勢だったときの逸話として以下のように言う：光祿傳祇、太常摯虞遺軌書、告京師飢匱、軌即遣參軍杜勳獻馬五百匹、毯布三萬匹。
- 26) 『晋書』巻86, p. 2223に、永嘉二年 (308) のこととして「軌後患風、口不能言、使子茂攝州事。」とある。
- 27) もっとも弱体化しないδyβp'δkも見られるので、複合語に入ったときp'δの要素が短母音化するという規則があったわけではない。
- 28) 荒川教授は、『梁書』巻54, p. 811の記事に言及して、麴氏高昌国の初代の王である麴嘉に対して北魏が「司空」の称号を与えた事例に言及して、国外の支配者に司空の称号を与える場合があったことに筆者の注意を喚起された。
- 29) 張軌の経歴や称号についての史料は、峰雪幸人博士から提供されたものの抜粋である。張軌が司空の称号を得た時期についての筆者の質問に答える際に提供して下さった。なお、張軌が司空になった時期について峰雪博士は独自の見解を持っておられる。その見解は下で引用する。
- 30) なお峰雪博士によれば、この年に張軌は司空の位を進められたとする史料もあるという：永嘉六年・・・秋九月、秦王為皇太子遣使拜軌驃騎大將軍、儀同三司、進位司空、封西平公、邑三千戸、固辭不受。(明・屠喬孫等『十六国春秋』巻70)。ただ博士によれば、この史料はあまり信頼できないという。博士は、当時の西晋の司空について『晋書』巻5から以下のような記事を集めて下さった：永嘉五年 (311) 五月、進司空王浚為大司馬、征西大將軍、南陽王模為太尉、太子太傅傳祇為司徒、尚書令荀藩為司空、安東將軍、琅邪王睿為鎮東大將軍。(『晋書』巻5, p. 122) 建興元年 (313) 九月、司空荀藩薨于滎陽。(『晋書』巻5, p. 127) 建興二年 (314) 二月、壬寅以司空王浚為大司馬、衛將軍荀組為司空、涼州刺史張軌為太尉(『晋書』巻5, p. 128) これ等の記事をもとに、「愍帝即位 (313) の四月に張軌に司空が与えられたのでもなく、九月の荀藩の死去後に司空が張軌に送られたものの辞退され、その後、王浚が司空に任命されたとみるのが穏当かと思います (314年二月まで司空に在任)。」としておられる。
- 31) Sims-Williamsは不明語としながらsy-skwnyのように分析し、後部をtyw'k skwny「幼少期」、m's'k skwn'y「老齡」と比較する一方、先行するsy-を、s'ywk「孤兒」と関連づけることができるかもしれないとする。そしてこの孤兒と関連する意味は、後続するp'pδyの彼が推定する意味「身寄りの無い」とよく一致するとしている。
- 32) よく知られた事実として、韻書が完備している上に周辺言語の借用形や、外国文字による音写資料が充実している中古漢語の再建形は信頼できる一方、上古音は不確定要素が多い。提案された種々の再建形は、最新のものと

- も筆者のような素人が安易に利用できるものではない。
- 33) 無論、cnが精確な音写ではなく簡略表記であった可能性も排除できない。
- 34) 野原将揮「構擬“泉”字音—兼論“同義換讀”」、『中國語言學集刊』12-1、2019, pp. 74-87.
- 35) Henningはthe last Emperorと大文字表記にしている。
- 36) “In that month (= June 313, YY) Nanaivandak can hardly have known yet of Min-ti’s accession.”
- 37) 例えば、D. N. MacKenzie (1976) が校訂した『維摩経』の翻訳の70行目では「畢竟」に、同じくDhuta-textの69, 192, 253行目では「究竟」に対応している。他にも用例はあるが、省略する。
- 38) 実際Sims-WilliamsはGlossary (p. 116a) において、prβtmの訳語としてlastとmost recentをあげている。これはlast weekのlastの意味をprβtmに想定しているのであろう。
- 39) 対応する中国暦の日付については下記を参照せよ。
- 40) Henning 1948, p. 614, n. 1に従う。
- 41) 西方に送られる手紙は、河西のソグド人聚落を東から順にたどってピックアップされ、敦煌から外地に向けて送付されたという前提に立つと、敦煌で書かれた書簡I, IIIの日付が一番遅く、姑臧で書かれた書簡Vの日付が最も早いことになるという推定に基づいている。Grenetは、書簡Vは313年に、書簡I, IIIは314年に書かれたと考えた。書簡IIの日付は、その中間にあるので、彼の論理に従えば、書簡IIは敦煌と姑臧の間にある都市で書かれたことになる。その中で有力な候補として張掖を想定している。確かに、敦煌から発信された書簡IIIには受取人の娘が書いた追伸が添えられていて、宛名の部分も本来のものとは別に書き足されているので、慌てて書かれたようだ。手紙を運ぶキャラバンの出発に間に合うように急いで書き足されたような印象を与えるので、書簡IIIが他のすべての書簡より遅く書かれたであろう。ただ当時のソグド人たちの郵便の集配やネットワークの実態が分からない以上、他の手紙が書かれた場所を、日付だけをもとに推定できるかどうか分からないのではないか。
- 42) Grenetは4月21日とするが誤解である。Henningが313年の場合を想定して割り出した西暦の日付が314年にも当てはまると誤解している。
- 43) ここでもGrenetは誤解して11月30日だとしている。
- 44) 日付を考慮して書簡IIが書かれたと推定する張掖の西の都市を推定している。
- 45) 書簡VIには楼蘭に行くように命令されていたことが記されており、楼蘭に最も近い都市を推定している。
- 46) 松丸道雄他（編）『世界歴史大系 中国史2 三国・唐』東京 1996, 年表p. 50は、二十三日を張軌の死亡の日付にしている。下でも述べるように、Henning (1948, p. 611) は書簡IIの日付にあるcyrδsw'n MR'Yを張軌と見なすが、なぜか張軌の死日をユリウス暦の314年7月8日であるとしている。ただこの日付は、中国暦では建興2年六月九日になるので、五月に死んだとする史料の記事と一致しない。
- 47) Grenetの推定に従えば、313年の5月（書簡V）から翌314年の4月（書簡I, III）までのほぼ1年間にわたっている、Grenet, *ibid.*, p. 65.
- 48) 後の張駿（位324-346）の時代には積極的に西域経営にも乗り出していたが、張軌の時代は敦煌までを領土としていた（前田 1981）。書簡IIの「金城（あるいは姑臧？）から敦煌まで」という表現はそのことを示している。金城か姑臧かの問題については、上記注19を参照せよ。張駿の時代、建興18年（330）三月十七日の日付のある、楼蘭出土木簡については下記参照。
- 49) この問題についてはGrenet (*ibid.*, p. 66) に簡単な議論がある。Grenetは北朝期には“caravan leader”から、“leader of a foreign community”に変化しているとしている。一方筆者は、薩宝は、商人集団のリーダーという役割を持ち続けたと考えている、吉田（近刊）。なお類似の形式の薩薄は、梵語のsārthavāhaの音写語で、同じ意味ではあるが、仏典に限定される。高昌国の文書では薩薄があるとされるが、これはむしろ薩簿と読むべきでs'rt'p'wの音写語の一つであろう、荒川（1998, pp. 165-171）。ちなみに筆者は、薩宝は胡王、商将、首領などとも呼ばれたと考えている、吉田（2023, pp. 48-49）。
- 50) 楼蘭も同じで、ソグド文字ではkr'wr'nと表記されている。
- 51) de la Vaissière（影山訳, p. 41）。ただしtryh, pty'δ, "δwkhはそこには含まれていない。tryhは意味不明の語であったが、今回Sims-Williamsが意味を明らかにした。mδ-とpty'δは、tryhの値段がつかないという苦情を述べる件で、「ワインがあっても飲むカップがないようなものだ」という文脈に現れるので、商品ではなかったのかもしれない。
- 52) pyrcykはpyr「虫、蚕」から派生した形容詞・名詞であり（Sims-Williams 2008）、具体的には「真綿」、「生糸」、あるいは「絹布」を意味する可能性がある。pyrcykの語源とシルクロードの交易品としての性格を考慮すれば、「真綿」あるいは「生糸」のほうがありやすいかもしれない。コートンでは真綿や綿花はthamgaという重量単位で計量されていた、吉田（2006, p. 108）。thamgaはソグド語のδnkと同源である。書簡Vの26-27行目には、δnkによって計量された'st(k)[](m)という商品が見られる。これは真綿を意味する語であろうか。なお下で言及する称価銭文書では、「糸（＝絲）」も重量単位の「斤」で計量されている。
- 53) この事を伝える記事は以下の通り：愍帝即位、進位司空、固讓。太府參軍索輔言於軌曰：「古以金貝皮幣為貨、息穀帛量度之耗。二漢制五銖錢、通易不滯。泰始中（265-274）、河西荒廢、遂不用錢、裂匹以為段數。縑布既壞、市易又難、徒壞女工、不任衣用、弊之甚也。今中州雖亂、此方安全、宜復五銖以濟通變之會。」軌納之、立制準布用錢、錢遂大行、人賴其利（『晋書』卷86、2226頁）。前涼には「涼造新泉」という2g程度の重量の貨幣があっ

- た：山崎直人「中国貨幣の歴史13」(https://www.imes.boj.or.jp/cm/research/kinken/mod/gra_china13.pdf；2024年6月25日閲覧)。
- 54) トルファンのアスターナで発見された所謂称価銭文書は7世紀初めのトルファンのバザールで量り売りされていた物品のリストであるが、糸（絹糸）以外は、貴金属、香料、薬品などすべて西方から持ち込まれてきたものである、荒川 (2019, p. 42)。
- 55) de la Vaissièreは鉛白（胡粉）のことだとする、影山訳, p. 41, idem 2024, p. 296. iiiii βnt「4束」と呼ばれていることから、筆者は'spytcを香木で白檀のことだと考えた。Sims-Williamsは筆者の比定を採用している、Sims-Williams (2023, p. 54)。
- 56) Grenetは、それらの後に続く意味不明の2つの物品と2分の1スタテルの銀も発送されるものと理解している。しかしそれらにはpr prstw「発送用」という表現が添えられていないので、これら残りの3点は発送するべきものではなかったと考えられる。
- 57) 荒川 (2024, p. 28) によって訂正された、西暦743年の交河郡市估案の1分（＝約9.3g）の重量によれば、6000gの中程度の品質の白檀は、約25,800銭の値段になり、銅銭32＝銀銭1の換算値に基づけば、およそ806ドラクマほどになる。奴隸の値段が、一人120ドラクマだとすると、この香木1本は、奴隸6～7人分の値段になる。それを10本束ねた束が4つあれば、奴隸240～280人分の値段になる。相当の額であったに違いない。
- 58) Sims-Williamsの訳は“wheat”「小麦」である。この種の穀物の納入関連の漢文文書で対応する語は「粟（粃穀付きの穀物）」であって、必ずしも小麦に限らなかったであろう。
- 59) その場合、書簡VIIでδwkhに後続するpr krynh「krynhのために」のkrynhがKucha Prakritのkriniya「買うこと、税の一種」と比較できるなら（Sims-Williams 2023, p. 60）、意味としては漢語で穀物を購入することを意味する「糴（穀／買）」に対応しているのではないだろうか。この文脈で動詞's'yt「搬出する（原義：取る）」が使われていることも注目される。上記註18も参照。
- 60) この木簡の解釈については、Hansen (2017, p. 60) および de la Vaissière (2024, p. 528a)も参照せよ。de la Vaissièreは、ソグド商人が軍隊に穀物を納入する非常に早い例として興味深いとしながら、木簡の漢字の読みに不安が残るとしている。
- 参考文献
『三国志』、『晋書』、『(資治) 通鑑』のテキストは中華書局の標点本から引用する。
- Karlgren, B., 1957. *Grammata Serica Recensa*, Stockholm.
- Grenet, F. and Sims-Williams, N., 1987. “The historical context of the Sogdian Ancient Letters”, *Transition history of Iranian history*, Leuven, pp. 101-122.
- Hansen, V., 2017. *The Silk Road. A new history with documents*, Oxford, 2017.
- Harmatta, J., 1979. “The archaeological evidence for the date of the Sogdian <Ancient Letters>”, in: J. Harmatta ed. *Studies in the sources on the history of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest, pp. 75-90 (reprint of the article published in 1976).
- Harmatta, J., 1979a. “Sogdian sources for the history of Pre-Islamic Central Asia”, J. Harmatta ed., *Prolegomena to the sources on the history of Pre-Islamic Central Asia*, pp. 153-165.
- Henning, W. B., 1948. “The date of the Sogdian Ancient Letters”, *BSOAS*, 12/3, pp. 601-615.
- Lurje, P., 2010. *Personal names in Sogdian texts*, (R. Schmitt, et al. (eds.), *Iranisches Personennamenbuch*, Band II, Faszikel 8), Vienna.
- de la Vaissière, É., 2004. *Histoire des marchands sogdiens*, 2nd ed., Paris: Collège de France, Institut des hautes études chinoises (本稿ではエチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール著・影山悦子訳『ソグド商人の歴史』岩波書店, 2019から引用する)
- de la Vaissière, É., 2024. *Asie centrale 300-850. Des routes et des royaumes*, Paris: Les Belles Lettres.
- MacKenzie, D. N., 1976. *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Leiden/Tehran.
- Pelliot, P., 1931. [Review of Reichelt 1931], *T'oung Pao*, 28, pp. 457-463.
- Reichelt, H., 1931. *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums*, II, Heidelberg.
- Sha Wutian, 2024. “Images of silk along the Silk Roads: Dunhuang mural paintings and Tang funerary figurines”, in: M. C. Wang and R. R. Overbey (eds.), *Beyond the Silk and Books Roads*, Leiden/Boston, pp. 254-325.
- Sims-Williams, N., 1986. “Sogdian “ōprm and its cognates”, in: R. Schmitt & P. O. Skjærvø (eds.), *Studia grammatica iranica, Festschrift für Helmut Humbach*, München, pp. 407-424.
- Sims-Williams, N., 2008. “The silk worm in Sogdian”. *One for the Earth: Prof. Dr. Y. Mahyar Nawabi memorial volume* (ed. M. Jaafari-Dehaghi), Tehran, pp. 113-116.
- Sims-Williams, N. with contributions by F. Grenet, 2023. *The “Ancient Letters” and other Early Sogdian documents and inscriptions*, London.
- Sims-Williams, N. and J. Hamilton, 2015. *Turco-Sogdian documents from 9th-10th century Dunhuang*, London.
- Yoshida, Y., 2013. “When did Sogdians begin to write vertically?”, *Tokyo University Linguistic Papers* (『東京大学言語学論集』) 33, Festschrift for Professor Hiroshi Kumamoto, pp. 375-394.
- 荒川正晴 1998「北朝隋・唐代における「薩寶」の性格をめぐって」東洋史苑 50/51合併号, pp. 164-186
- 荒川正晴 2010『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋大学出版会

- 荒川正晴 2019「ソグド人の交易活動と香料の流通」、専修大学社会知性開発研究センター『古代東ユーラシア研究センター年報』第5号、2019/3, pp. 29-48
- 荒川正晴 2023「玄奘とトルファン」近本謙介・影山悦子（編）『玄奘三蔵がつなぐ中アジアと日本』京都：臨川書店, pp. 1-31
- 荒川正晴 2024「ユーラシアの東部論再考―「世界」の一本化への胎動を如何に考えるか―」『史学研究』第318号, pp. 1-29
- 東野治之 1987「法隆寺献納宝物 香木の銘文と古代の香料貿易―とくにパフラヴィー文字の刻銘とソグド文字の焼き印をめぐって―」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』no. 433, 1987年4月号, pp. 4-15
- 藤枝晃 1971『文字の文化史』東京（再版講談社学術文庫 1999）
- 前田正名 1981「前凉国の境域について」『駒澤大學文學部研究紀要』39, pp. 39-69
- 護雅夫 1976『古代遊牧帝国』中公新書
- 森安孝夫 2016『シルクロードと唐帝国』、東京、増補改訂版、講談社
- 吉田豊 1988「ソグド語雑録（Ⅱ）」『オリエント』31-2 (1988), 1989/3, pp. 165-176
- 吉田豊 1994「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報 京都』66, pp. 380-271
- 吉田豊 2006『コートン出土 8－9 世紀のコートン語世俗文書に関する覚え書き』神戸市外国語大学研究叢書38, 神戸市外国語大学外国学研究所
- 吉田豊 2014「ソグド文字の縦書きは何時始まったか」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』アジア遊学 175, 東京：勉誠出版, pp. 15-29
- 吉田豊 2022『ソグド語文法講義』京都：臨川書店
- 吉田豊 2023「第二章 玄奘とソグド人」近本謙介・影山悦子（編）『玄奘三蔵がつなぐ中アジアと日本』京都：臨川書店, pp. 33-66
- 吉田豊（近刊）「シルクロード商人の妻たちの墓誌から―西安出土の3つの中世イラン語碑文―」
- 吉田豊／森安孝夫／新疆ウイグル自治区博物館 1988「麹氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」『内陸アジア言語の研究』4 (1988), 1989/3, pp. 1-50
- 榮新江 2001『中古中国与外来文明』北京

